（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　呉　玲青

本論文は、18 世紀から 19 世紀にかけての台湾島と福建本土との間における米穀と銀の移動を財政的な視点から分析し、同時期の台湾ー福建間の財政関係を明らかにしようと試みた研究である。台湾は清代初期に清朝の領土となり福建省に属したが、台湾では人口に比して米穀の生産量が多く、それに対して福建の本土側は人口が稠密で米穀の不足する地域であったため、台湾で土地税として徴収した米穀の一部を軍糧や備蓄米として福建本土に移送し（「台運」）、福建本土で徴収した税銀の一部を台湾財政の補填として移送する（「台餉」）という形での米と銀との交換関係が形成されることとなった。本論文は、「台運」「台餉」の展開及び衰退の過程を、単に米穀と銀の移出入の動向として把握するのでなく、その時期ごとの具体的財政問題の解決に向けた試みとして捉え、その政策決定過程を詳細に検討している。

内容はほぼ時期順に五章に分かれる。第一章では、18 世紀を中心に、「台運」と「台餉」がそれぞれ台湾の財政状況とどのような関係にあったかを論ずる。「台運」を中心に論じた第二章・第三章では、18 世紀末から 19 世紀前半の台湾各地及び福建本土各地の米価の統計的分析を通じ、林爽文の反乱の後、台湾南部の米価上昇に伴い福建と台湾南部との米穀価格差が減少ないし逆転し、民間商船の活動が米価の比較的安い台湾北部の港へと移っていったこと、それによって従来南部を中心に民間商船に委託する形で行なわれていた「台運」が衰退していったこと、などを指摘する。第四章では「台餉」に焦点を当て、19 世紀前半、「台運」の衰退とともに「台餉」の額は減少していくが、その実「台餉」とは別に福建から台湾への財政援助は続いており、台湾財政はそれに依存していたことを述べる。第五章では、19 世紀の台湾における土地税の銀納化の実態を検討し、従来の実物納から、支出目的に応じた銀納・実物納の並存状態を経て、19 世紀後半には全面的銀納へと転換してゆくことを指摘する。

上奏文などの公文書、官僚の文集、地方志などを広く渉猟して克明な検討を行ない、それぞれの時期のどのような具体的課題を背景として政策が変更されていったのかを明らかにした点は、本論文の功績である。また米価の分析においても、従来は十分に注目されてこなかった府の内部の地域差に着目し、かつ福建本土と台湾の両者を総合して検討を行なった点は、新味ある成果といえる。個別事実の立証や先行研究の部分的修正に力点が置かれた結果、著者の描く全体像が見えにくく、やや冗長な印象を与える部分も少なくないが、従来の研究で見過ごされてきた諸事実を手堅い論証によって明らかにした点は十分に評価すべきである。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。